

「 倭王や倭軍は大伽耶の人々 」

福島 巖

— 目 次 —

1. 倭国軍の誕生
 - (1) 国譲りした後、国つ神系の人が高霊に戻る
 - (2) 強力な倭国軍の編成
2. 倭国軍の戦い
 - (1) 倭と新羅の紛争（2～4世紀）
 - (2) 倭と新羅の紛争（4～6世紀）
 - (3) 倭軍の戦いの内容総括
 - 1) 倭軍と新羅軍の典型的な戦い
 - 2) 倭軍が金城に進撃して戦ったルート
 - 3) 補給所（基地）の場所
 - 4) 倭国の軍事基地
 - 5) 倭軍の構成
 - 6) 新羅の首都金城について
 - 7) 中国各国への使節の派遣
3. 倭の五王が天皇でない証明
 - (1) 国王と武将では認定される爵位は別もの
 - (2) 大和の天皇と倭の五王の在位時期の比較
 - (3) 倭の五王が中国に何を求めたか
 - (4) 軍事権を要求した六ヶ国とはどこか
 - (5) 中国はどう返事してきたか
 - (6) 倭国全盛時代を築いた武王
4. 任那（伽耶）解体のプロセス
 - (1) 金官伽耶の繁栄と没落
 - (2) 金官伽耶の滅亡
 - (3) 四ヶ国の戦国時代と統一新羅まで
 - (4) 戦国時代の英雄と倭軍の指導者
 - (5) 伽耶（加羅）滅亡へ
 - (6) 百済の聖王がなぜ敗れたか
 - (7) 任那と伽耶（加羅）について
 - (8) 半島で活躍した倭王と倭軍のまとめ

倭王や倭軍は大伽耶の人々

倭国や倭王という全て「日本のこと」を指すという遺伝子が働いてしまうが、これは間違った考えであるという事を多数の事例で証明することがこのレポートの目的である。5世紀以前の倭国本体は朝鮮半島にあり、倭国本体が日本に移転し列島が倭国になったのは6世紀以降のこと。中国が認識している倭の五王は朝鮮にあった国の王であり大和の天皇とは全く関係の無い人だった。

1. 倭国軍の誕生

(1) 国譲りした後、国つ神系の人が高霊に戻る

160年頃出雲の国で行われた国譲りがあってから列島の開発は天照系が全面的に推進することになり各地に天孫降臨が行われた。一方、国つ神系は王族・軍人・役人など上層部は祖神スサノオの出身地、高霊に戻ってきた。洛東江を遡上し、伽耶山の麓に引き上げてきた人々は生活環境が激変し毎日の生活が苦しくなっていた。狭い町に騒動が絶えず食料や土地を巡って争い事が多発、50年以上に及ぶ倭国大乱を引き起こしていた。男たちの武力による共同体の形成は不可能で、突出した巫女さんの宗教の力によってのみ、国をまとめることができた。中国に倭国として認められた「邪馬台国」と女王「卑弥呼」の誕生である。幸運なことに洛東江上流の一带には鉄の原料になる鉄鉱石が豊富に存在していたため鋼の原料になる銑鉄を大量に造りだすことに成功していた。

*****魏志辰韓伝の記載*****

国は鉄を産して韓人・濊（わい、東海岸に住む）人・倭人は皆それを取る作業をしている。市場では皆が物を購入する際、鉄を用いている。中国で銭を用いるようなもの。楽浪・帯方二郡にも鉄を供給している。

(2) 強力な倭国軍の編成

銑鉄（鉄の半製品）の交易で金官伽耶と高麗の邪馬台国は経済的に豊かになり女王国も2代（卑弥呼と甕与）で終わり男王をトップに頂く大伽耶国が誕生した。この国は卑弥呼の国を引き継ぐ倭国でもある。兵器を鉄で固めた倭国軍は装備が強力であったのと指揮命令系統がすっきりしていて強力であった。隣り合った東海岸寄りの金城（慶州）には毎年攻略し、ある期間王宮を支配下に置くような戦争を仕掛けていた。

2. 倭国軍の戦い

(1) 倭と新羅の紛争 (2~4世紀)

朝鮮半島南部に位置する新羅と伽耶諸国は国ができたのも同じ時期であり隣り合っている
ので国境を巡ってトラブルが多かった。三国史記の新羅本記をベースに両国の関係を取り
出してみた。

朝鮮三国と称される高句麗・新羅・百済が誕生したのは紀元前後の時期である。その前の
時代には隣の大国中国の漢が進出してきて、西部にあった衛氏朝鮮を滅ぼし、半島に植民
地を作り支配していた。ほぼ全域に4郡(真番郡:南西部、臨屯郡:北東部、玄菟郡:北
方、楽浪郡:平壤付近)を設けていた(BC108年)。

真番郡と臨屯郡は楽浪郡に編入される。また北部にあった玄菟郡は高句麗の誕生と共に西
に追いやられてしまい楽浪郡が大きくなって残った。首都平壤は最盛期6万余戸、人口4
0万人を数える都市だった。建安年間(196~220年)には公孫康が荒地を分割、南方に帯
方郡を設立した。この両郡も高句麗に敗れて半島はAD313年に中国の支配から脱出できた。

中国の影響は遼東半島以北が強く楽浪郡以南は弥生時代からの群小国家の集合体で西部に
馬韓(50余国)、東部に辰漢(秦からの移民が主で12国ヶ国)、最南部に弁漢(弁秦
とも、12ヶ国)の原三国と称する国々が存在した。

鴨緑江の上流にあった漢の玄菟郡は扶余族の朱蒙に追われて遼東方面に移動した。ここに
できた国が「高句麗」であり王子の兄が引き継いだ。朱蒙の弟王子は百済の国を作り漢江
に移動した。新羅の金城と金官伽耶(加羅)は60kmと近く国境も明確なものがないまま洛
東江を挟んで住分けるといった状況のため両国間の紛争が絶えなかった。紀元前後に国を
作った新羅と伽耶諸国は隣同志で接近していたため紛争が頻発していた。

三国史記によると59年に4代脱解王の時、倭国と新羅は国交を結び使者を交換したとある
のでこの時大まかなルール「洛東江以西は伽耶諸国に、以東は新羅の領域」のようなもの
が定まった可能性がある。

「伽耶を知れば日本の古代史がわかる」 コ・ジュンファン著の資料から引用した伽耶諸国の配置はこれをベースに作成されたものとする。



図一 1 伽耶諸国と新羅の領域

洛東江を境界にしてその西側を伽耶諸国（加羅）の領域、東を新羅の範囲としたものの定着して時間が経つにつれて境界は変化して行った。

三国史記新羅本記の記事から抜粋

115 新羅が伽耶南部の辺境に侵入する。秋洛東江を渡るも伽耶の伏兵に囲われ退却した。

116 新羅王、1万の兵士を連れて伽耶を侵略。伽耶は城に籠って死守し雨で退散した。

123 新羅 倭と講和した。（境界などを定めた）

新羅と金官伽耶が半島南部に国を構えて洛東江を挟んで国境とする条約を定めたがこの時は川の兩岸付近でつばぜり合いが生じていたようである。

80年ほど経ってからは次の記事がある。160年頃国譲りが行われて出雲は天照系に管理が移った。出雲にいた兵士や役人が戻ってきて半島南部では住居地や食糧の確保で大混乱を起こした（倭国大乱）。*****

193 倭人が大飢饉に見舞われて食料を求め、4千人もの人が新羅の領域に入り込んできた。

201 伽耶国が講和を新羅に申し込む。

208 倭人が国境を侵した（新羅一金官）

一方伽耶諸国は金官国の支配力が強まったためか隣り合った沿岸に国を構える国々が連合して攻撃をしてきた。それを新羅に助けてもらった。

209 浦上8ヶ国（固城・古城・泗州など）が連合して加羅（金官伽耶）を侵略しようとした。加羅の王子が新羅に救援を求めた。

212 伽耶は王子を人質として新羅に送ってきた。

この時代「高霊の地に邪馬台国」として卑弥呼女王が誕生して国をまとめた。高霊一帯で鉄の鉱山が見つかり鉄の産出量が急激に増えた。大伽耶地域にあった鉄鉱山：冶爐鉄山、黄山鉄山、尺旨山鉄山、毛台里沙鉄鉱など。

伽耶の製造技術の初期には1000℃前後の火力で錬鉄を作り、鍛錬して作っていたが、その後改良されて1200℃以上の高温で炒鋼法を用いて大量生産が可能になった。

鉄を農機具に利用することで農産物の生産力を飛躍的に向上させた。また兵器に応用することで強兵軍団が生まれて国力を維持できた。これを示す事例として

232 倭人が突然侵入して金城を包囲した。新羅の助賁王自ら城を出て戦った。逃走した倭軍を騎馬隊で追撃して千余人を殺し、捕えた。

233 5月倭軍が新羅の東部国境を侵した。7月新羅、倭人と沙道（洛東江の上流・新羅と百済の間、現尚州市）で戦った。風向きを見て火を付けて船を焼いたので敵は水におぼれて死亡した。（この場所は洛東江の末端、西部地域で峠を越えると百済に達する）

卑弥呼が魏に朝貢を開始する頃には倭軍はかなり強力な軍隊として登場してきていたことがこれらの記録から読み取れる。倭軍は攻め込まれたことはほとんど無く一方的に新羅軍が守勢に立たされている。

290 前後ほぼ毎年倭人が沙道近傍で新羅と紛争を起こしている。

287 倭人一礼部（星州か）を襲い村々に火を付けて焼き払い千人の住民を捕えた。

292 倭兵沙道を攻めるも新羅は兵を送って助けた。

293 新羅は沙道城を改築し州の有力者 80 余家を移した。

294 倭兵が長峰城を攻めたが新羅は勝てなかった。

295 倭人がしばしば新羅の城や村を襲うので安心して生活ができない。総理級の弘権の言葉：「新羅兵は水上戦は不慣れである。百済と共同で倭に対抗する案については百済の言葉に嘘が多く信用できないので困難である。」

新羅と百済が接する西部の境界にて大きな紛争を起こしている、ここでは倭国軍が優勢であり新羅の軍隊は船の操作ができない。

300 新羅は倭国と国使の交換を行った。

312 倭国王が使者を送り王子の花嫁を羅に求めたので大臣の娘を送った。

344 倭王 再度花嫁を求むも新羅はこれを辞退した。

345 倭王 国交断絶を宣言。

346 倭軍 風島を襲い辺境地帯を掠め取った。更に進んで金城を包囲して激しく攻めた。王は戦おうとしたが大臣の康世は「相手は遠くからやってきている。今は勢いがあるので軍の疲れを待ちたい。」相手は食糧が無くなり退却しようとしたので精鋭な騎馬隊を率いて追撃し敗走させた。

364 倭兵大挙して侵入した。彼らの勢力に対抗できないので草人形を数千個作り衣を着せて兵器を持たせ吐含山（仏国寺のある山）の麓に並べて置いた。勇士千人を斧見の東の野原に伏せておいた。伏兵で不意打ちを掛けたので倭軍が敗走したので追い打ちをかけて勝利した。

軍が強力な軍隊である事、食料が尽きるのを待って追撃しているので1日で移動できると

ころに拠点があることが推定できる。日本列島から船で軍隊を派遣して戦わせるという論では全く説明ができない。

これから5世紀に入って倭国軍の活躍が更に勢いを増して朝鮮南部の山野を駆け巡る戦闘が展開されていく。この軍隊が日本の大和から派遣された軍であるという日本の常識には首を捻らざるを得ない。シーズンが来ると毎年数万人規模の部隊が数千の騎馬兵を同行して攻撃に参加している事実である。

(2) 倭国と新羅の紛争(4~6世紀)

4世紀半ばから高句麗が南下してきて、百済が追われ漢城を放棄して南に移った。このような事情で半島南部にあった国々(高句麗・新羅・百済・倭)が密集してきて国の境界争いが厳しくなり武力で争う戦国時代になってきた。南東部に国を構えて倭国以外とは干涉の少なかった新羅は相対的に力不足になり独力では対抗できないので高句麗と結んで行動しようとして動き出した。また百済も高句麗に対抗するには軍事力に不安があるため倭国を頼りに軍事同盟を締結して助けを得てバランスを取ろうとした。

364 倭兵大挙して新羅に侵入した。彼らの勢力に対抗できないので草人形を数千個作り衣を着せて兵器を持たせ吐含山(仏国寺のある山)の麓に並べて置いた。勇士千人を斧見の東の野原に伏せておいた。伏兵で不意打ちを掛け、倭軍が敗走したので追い打ちをかけて勝利した。

372 百済肖古王、倭王「旨」に七枝刀を献じる。

倭軍が強力であることから倭—百済同盟を結成した。それを記念するため依頼者側の百済が倭王に奉じたのがこの刀剣。献じた相手は半島の「旨王」にであり現在石上神社に保管されているのは6世紀倭国の人々が日本に移った時に奉納されたもの。

392 高句麗から使者があり、高句麗の国力強大なため、新羅は伊滄(総理格)大西知の子どもを人質として送った。

393 倭軍が侵入し新羅の金城を5日間包囲した。将軍は戦おうとしたが王は持久戦に持ち込んだ。倭軍は食糧が無くなりやむなく退却を始めた。王は騎馬隊3百人を派遣して帰路を遮断し歩兵隊千人を送って独山(西面)に追い込んで挟み撃ちをして大敗させた。

広開土王碑に記載されている400年の高句麗と新羅連合軍による倭国軍を破った戦争の記事は三国史記にはないが広開土王碑の内容を追加すると

396 広開土王は軍を率いて倭と結ぶ百済を撃ち、人と領土拡大に空前の大成果をあげた。

399 百済が倭と内通したので、広開土王は平壤に下り倭の進出に直面した新羅の救援を決定した。

400 高句麗は5万の大軍を派遣して新羅を救援した。新羅の王都を占拠していた倭軍が退却、これを追って任那・加羅（金官）に迫った。ところが安羅軍などが逆をついて、新羅の王都を占領した。高句麗軍は陸路更に回り込んで進軍し百済の地まで進撃して攻撃を加えた。

404 倭はまた平壤付近（帯方郡の故地）に迫った。倭と百済を広開土王は自ら率いてこれを撃った。

407 王は五万の兵を派遣し、百済と倭を撃った。

慶州の敵を追い出した高句麗の大軍は金官・阿羅など海岸国を追って行き、蹴散らしたあと西海岸の百済・倭の本拠地を攻撃した。この後広開土王は北の燕国との戦いに入っていく。しかしこの後の倭軍の動きをみるとうまく逃げ回ったらしく被害は少なく倭の五王の時代を迎えている。

402 新羅は倭国と国交を結び未斯欣（みしきん）を人質にした。

405 倭兵が侵入し新羅の明活城（慶州市内）を攻められたが新羅は勝てなかった。騎兵を用いて独山の南で勝った。

407 倭人が東部の辺境に侵入（3月）、南部の辺境を犯し百人を奪った。（6月）

410～420 高句麗・新羅・倭国の外交活発に。奈忽王子と朴好を高句麗の人質に送った。

418 人の人質が高句麗から戻る。未斯欣が倭国（大伽耶）から逃げ帰る。（日本書紀には未斯欣が大和で人質にになり船で逃げたと記述）

416 百済は東晋の安帝に使者を送り「使持節・都監・百済諸軍事・鎮東將軍・百済王」として認められた。

421 倭王讃宋に朝貢、425、430年にも使者を派遣 中国南朝との朝貢外交を始める。

438 倭王珍宋に貢献し安東大將軍倭国王を認められる。

443 倭王済が追認される。

444 倭人が東部や南部の辺境に出没（431－439）していたが、この年10日間も金城を包囲した後食料が尽き引き上げようとした。訥祗王は数千予騎で追撃独山の東で合戦するも倭軍に敗北し大半が戦死した。

451 倭国王済が宋より、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓6ヶ国の諸軍事安東將軍倭国王を与えられる。

459 倭人 兵船百余艘を連ねて東海岸を襲撃し月城を襲撃したが新羅は王城を守り抜いた（洛東江から繰り出した船による攻撃、百済への支援は船を繰り出した戦いが多かった）

加羅国の最大版図

倭の五王時代の領域



図－2

462 倭人襲来、活開城を陥れ千人を連れ去った。

460 倭王済が没して興が引き継ぎこの年安東將軍倭国王を追認する。

463 倭人けつ良城（梁山面）を攻めるも新羅軍は勝てず退去した。王は倭対策で2城を作った。

475 高句麗の長寿王が3万人の軍隊で百済の王都漢城を包囲し攻めた。蓋鹵王は魏の文周に使者を派遣して救援を求めているが、救援前に百済の王都は陥落し蓋鹵王は殺害された。次の文周王は王都を熊津（公州）に移した。

477 475年から新羅への倭軍の侵略多く、王の居所を明活城に移していたがこの年倭人軍隊が五道の慶州につながるあらゆる方向から攻撃してきた。倭国、宋に方物を献じる。

478 興が没して武が倭王に、宋に百済を加えた7ヶ国を倭の軍事支配下として申請したが古くから交流のある百済を支配下に置くことは認められず従来通り6ヶ国のままだった。

481 高句麗・靺鞨北部に侵入。新羅は百済・伽耶連合と協力して防ぐ。

484 新羅は百済と協力して高句麗を撃破。

500 倭人が長峯鎮を落とす。

502 梁の武帝倭王武を鎮東大將軍から征東將軍に格上げした。

503 国名を「新羅」にし、「王」の称号を正式に採用。

522 伽耶国王 新羅に花嫁を求めてきた。

524 伽耶国王が来て同盟した。

528 初めて仏法を行った。訥祇王の時（417～458）高句麗から僧「墨胡子」が一善郡にやってきて仏教を伝えた。

532 金官国王「金仇衡」が王妃及び3王子（奴宗、武徳、武力）を連れ国の財物・宝物を持参して新羅に投降した。羅王は彼らを礼式に従った待遇をして上等の位を授け本国を食邑として与えた。末子の武力は新羅王朝で角干まで累進した。

以上が4世紀半ばから6世紀任那加羅（金官伽耶など）がその国土を新羅に分譲して半島を去るまでのできごとである。高霊の倭国は相変わらず存在したが半島の中枢部を支配して勢力を誇った倭王も西部地区を百済に分譲して日本に引き上げる動きが見られるようになってきた。

（3）倭軍の戦いの内容総括

1) 倭軍と新羅軍の典型的な戦い

「倭軍が侵入し新羅の金城を数日間包囲した。新羅軍はそれだけの兵士も武器も持っていなかったので王は持久戦に持ち込んだ。倭軍は食糧が無くなりやむなく退却を始めた。王

は騎馬隊3百人を派遣して帰路を遮断し歩兵隊千人を送って独山（西面）に追い込んで挟み撃ちをして大敗させた。」

というのが戦いであって船を利用した戦争では無かった。持ってきた食料を食べつくすと退去できる距離に徒歩や騎馬で退去できた。

2) 倭軍が金城に進撃して戦ったルート



図-3 倭軍の攻撃ルート

倭国から金城（慶州）に攻撃するための進撃ルートは4つ考えられる。

A：高靈か大邱から東に向かって攻める

B：金官加羅から北上する

C：海側のルートを北上

D：船で浦項（迎日湾）に着陸南下

帰路が西山であること及び船を使っていないことから金城攻撃ルートは「ルートA」のみである。

高靈から洛東江の支流を東に進んで金城に至るもの。

3) 補給所(基地)の場所



図-4 供給基地と司令部

戦場2ヶ所を示す： 東部の金城（慶州）と洛東江最上流の尚州である。

★印は伽耶の遺跡がありそこから武器類が出土した場所

◎は特に大きな遺跡から武器類が多量に見つかった古墳群のある所

ここは倭国軍の重要基地とみなして3ヶ所を候補に挙げた。

武器を出土した遺跡群を持つ倭軍の拠点：

加羅または大加羅（高靈）、卓淳国（大邱市・達句伐）、喙国（慶山郡）、梁山、
比自体国（古寧伽耶・昌寧）、星州国（星山伽耶）、
特に卓淳国は倭軍の大集積地で王は未錦早岐であった。

任那・加羅国の拠点：南加羅（金海・東萊釜山市）、安羅国（咸安）、多羅国（陝川）

4) 倭国の軍事基地



図一 5 軍事基地

高靈の町は金城との距離約 90km であるが軍事基地を作るには土地が狭い。大きな土地が広がる大邱市に軍司令部や兵舎があったものと思われる。金城へは約 50km の距離であり日本書紀にも「卓淳国」としてここを管理する王がいたことが記されている。また食料水や武器の供給を行う前線基地として 40km 離れた慶山があった。

慶州の町の南に南山があり古墳などがたくさん散在しているがその西方にあるのが西山である。



図一 6 金城からの帰路 西山の独山

西山と独山は金城の西方にある独立峯として推定したもの。

倭軍は新羅の城を占拠して食料が無くなると西山方向に退去するが、新羅軍はここにある独山に騎馬兵で倭兵を追い込んで待機していた歩兵とで挟み撃ちにすることを戦略としていた。

5) 倭軍の構成

倭軍は歩兵、騎馬兵、弓兵、枝戟兵などでできており大量の歩兵と 1000 人規模の騎馬兵力がいた模様。各地に馬の付く地名が多い・・・馬峴峠や馬邑など多数あり。

6) 新羅の首都金城について

慶州は四方が山に囲まれた天然の要塞の中にあり攻略されにくい環境にあった。緊急時に立てこもるための山城として

東・・・明活山城、

西・・・西兄山城、

南・・・南山城 の城があり外郭にも北兄山城、富山城、関門城などを供えていた。

海からの攻撃も一度浦項に着陸、兄山江に沿って進軍しないとできないので直接船からの侵略はできなかった。

7) 中国各国への使節の派遣

朝鮮半島の国々は自国の安全を守るため圧倒的な軍事力を持っている中国の皇帝に対して使節を派遣して朝貢を繰り返してきた。中国と遼東半島を介して接近している高句麗は頻度が高く年 1～2 回は朝貢を繰り返してきた。下表の東晋から随までの期間約 300 年間に高句麗 173 回、百済 45 回、新羅 19 回、倭国 11 回を数えている。新羅は統一新羅になってから頻度が増えるが倭国は百済と新羅を攻略して支配下に置き全盛を誇った時代に限られている。

朝鮮半島から中国への使節派遣回数					
国名	期間	高句麗	百済	新羅	倭国
東晋	317－420	15	6	2	1
宋	241－478	47	14		10
南斉	479－501	35	3		
梁	502－556	52	5	2	
陳	557－580	9	6	8	
随	581－618	15	11	7	

表－ 1

3. 倭の五王が天皇でない証明

中国に朝貢した倭の五王が中国の資料から明らかであるが現在大和の天皇がその対象者になっているがこれは全く別物であって朝鮮半島に存在していた「倭国」の王であった。それを証明するためにいくつかの資料を提供する。

(1) 国王と武将では認定される爵位は別もの

中国の諸外国の人に与える爵位について調査してみると宗主国（本国）の王やその重臣に与える爵位と武将に与える爵位の2種類があって全く別物であることが分かった。

	国王や貴族	武将のクラス
1	鎮国將軍	驃騎將軍
2	輔国將軍	車騎將軍
3	奉国將軍	征東將軍
4	奉恩將軍	鎮東將軍
5		安東將軍

実際には大將軍と將軍があるので級位は国王でカテゴリーで8階級、武将カテゴリーで10階級に分類されていた。

宋順帝（478）や齊高帝（479）への例では「加羅荷知国王（金官伽耶）」には「輔国大將軍本国王」が与えられている。8階級中の3位。

一方倭王武に対しては武将に与えられる爵位「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍倭国武」として認定されている。安東大將軍は10階級中の9ランクであり低いものだった。

ここで明らかなように国家の王に対する爵位とその軍事部門を担当する武将との間には歴然とした差があり倭王武を大和の天皇に比定するのは全く間違っていると思う。

「南齊書」からの引用

(2) 大和の天皇と倭の五王の在位時期の比較

日本歴史の常識とされる「倭の五王が大和の天皇である」ことに反対である証拠を作ってみた。

中国に朝貢した倭の五王と日本の天皇の関係													
年	倭	大和	年	倭	大和	年	倭	大和	年	倭	大和		
400			430	讃	允恭	460	済	5. 雄略	490	武			
402	1. 履中		432			462	4. 興				492		
404			434			464	興				494		
406		2. 反正		436					466			496	
408			438	2. 珍		468			498				
410			440			470			500				
412		3. 允恭	442			472	興				502		
414	1. 讃			444		3. 済			474			504	
416				446			476		5. 武 武			506	
418				448			478					508	
420				450		480		510					
422	讃			452	済	482		512					
424				454		484	4. 安康		514				
426	讃			456		486		516					
428			458		488		518						

表-3

この表は倭国の王が中国の王朝に朝貢した記録である。例えば王讃は414年から430年まで4回使いを送っている。

黄色は讃がこの期間在位していたことを示す。大和の天皇は記紀にある在位記録を表示、対応する倭王を同じ色で示した。（西暦との対応は困難なためほぼ同じ時期で比較した）

讃 - 履中：履中の在位は5年とされ全く合わない

珍 - 反正：珍は1回だけで在位期間不明

済 - 允恭：允恭の在位が長すぎる

興 - 安康：安康は在位3年、軍功を上げて2回も朝貢できるはずが無い

武 - 雄略：在位期間は合うものの5王の積算結果終わりが22年もずれる

倭の五王と雄略以下大和のの五天皇は全く関係が無く、別物であることが分かる。

(3) 倭の五王が中国に何を求めたか

438年王珍が宋に要求した内容を見ると

「使持節・都督倭 百済 新羅 任那 秦韓 慕韓 六国諸軍事・安東大將軍・倭国王」
がその内容である。

※使持節は軍令違反者に対する処分の権限を皇帝から与えられたことを示す位。「使持節」
が与えられる者は、宋の皇帝から大きく信頼されている証明。ランクがあり使持節・持節・
假節の順で権限と官位が違う。

※都督は監督、統轄の意味で、軍司令官のことをいった。周辺民族の王に対しても「都督」

の称号が与えられ、異民族懐柔策に用いられることがあった。
倭国の軍司令官が百済・新羅・任那など6ヶ国の軍事総司令官であることを要求している。

※安東大將軍は將軍のランク

將軍は最高の1品から小部隊長の10品にまでありとあらゆる階級を擁している。

1品の大將軍：軍務大臣相当 一切の軍事権を持つ

2品のA-3將軍：反乱など突発の軍事担当で元帥相当 驍騎・車騎・衛將軍

B-征*、鎖*で*の中には東西南北が入る：方面司令官

高句麗は征東將軍、百済は鎮東將軍と倭よりランクが高い。

3品の中に安*、平*：方面司令官で倭の要求は安東將軍であった。

倭国軍と中国との直接の戦役が無かったため軍事力が認められなかった模様。

讃王から興王までは安東將軍・倭国王のままだったが武王は宋から安東大將軍、

南斉から鎮東大將軍 479、梁から征討將軍 502 とランクが上がっていった。

(4) 軍事権を要求した六ヶ国とはどこか

倭・百済・新羅は半島先端にあって比較的分かり易いが倭と任那については解説が必要である。ここで述べる倭は大伽耶および大伽耶が軍事的に獲得した諸国。任那は金官伽耶・阿羅伽耶など半島最南端に位置する海岸や島々で構成される諸国。秦韓は新羅・百済・倭国の領域から外れている部分、慕韓も百済と倭国の領域が確定しない部分。日本列島は対象外であり半島内の国々のことを指している。

(5) 中国はどう返事してきたか

単に「安東將軍・倭国王」を冊封するという内容で、六か国の諸軍事は認められていない。同時に申請した倭随ら13人に將軍号を申請した部分は認めている。六国諸軍事が認められるのは済王 451 や武王になってからである。何回か遣使の派遣を通して済王の時初めて六か国の軍事支配権を承認した。武王の時はたくさんの官爵を得て国際的評価も高めることができた。ただ支配下にあったと思われる百済は、高句麗とともに中国とは古い付き合いで既に百済王に官爵を与えているので認めなかった(402年に鎮東大將軍)。

今力を落として倭国の軍門に入っているが正式に認めるわけにはいかないと断られた。倭国も途中から百済を申請対象から外している。

(6) 倭国全盛時代を築いた武王

五番目の倭王「武」の上表文は宋書「倭国伝」に記載されてその趣旨は

「祖先は休むことなく働き東方の55ヶ国(百済に含まれている国々)、西方の66ヶ国(新羅及び伽耶諸国に含まれている国々)、海を越えて北方の95ヶ国(日本列島の山陰・

北陸及び近畿地方の国々)を討伐しこれらの地に王道を知らしめ領土を広げてきた。宋の天子に会うべく準備しているが通路を高句麗に邪魔されて思うようにできません」と朝貢ができないことをお詫びしている。そして「都督倭・百濟・新羅・任那など六国諸軍事、安東大將軍倭国王」と称しているが公に認めて欲しいと記している。

478年に出された上表文は倭国がすごい勢いで国土を広げ南朝鮮にある新羅・百濟・任那を統治し大国になったことを認めてくれるように宋に迫ったもの。高句麗王には漢城百濟を陥落され倭王も手を焼いている姿が出ている。

朝鮮南部現在釜山飛行場ある場所金海市の洛東江に沿って六ヶの伽耶の国が存在していた。その中で中心になっていたのは金官伽耶(金海)と大伽耶(高靈)。AD42年頃の建国とされ両国の建国神話は同じで国の結びつきは兄弟の関係があった模様。倭国内で王の地位を約束されているのはこの両者に限られ四伽耶はそのサポート役を務めていた。

任那の国内は従来から住み続けていた弁韓からの集団と倭人集団の混合体であった。金海は広大な平坦地が広がり農産物が豊かであり洛東江を背景にした港は国際的な交易の中心をなしていた。また洛東江上流にあった高靈は鉄山が多く良質な鉄の生産地であると同時に川を通した東西の交通路の中心であった。

正史も無く新羅と百濟の争いに敗れて国が無くなったので全く訳が分からないとしているのが韓国の教科書。三国史記に倭人と倭国は取り上げられているが倭国としての取り扱いはなされていない。しかし断片的な資料を付き合わせて考えていけば本当の姿が分かってくる。倭国は1世紀頃南朝鮮任那の地に落ち着いて生活を開始した。彼らは海洋民族であり住みつくと同時に幅広い活動を開始している。

西には建国間もない百濟や新羅がありこれを傘下に入れその先の高句麗と交戦している。東にある日本の九州は箱庭的な存在で船で交易しながら次々と植民地を広げていった。

海を渡った北とは海流に乗ってたどり着いた日本海側の諸国でこの時期に越の国まで大伽耶系のスサノオやオオクニヌシの出雲の国があり多数の小国家を藩中に納めていた。また大伽耶出身のツヌガアラシトがやってきて鉄を通した近畿地方の国土開発を行い小国家群を作っていった。それらが「倭王武」が述べている祖先が切り拓いた「海を越えて北方の95ヶ国」の内容である。

中国への朝貢ルートはほとんどの場合遼東半島と山東半島を結ぶ航海ルートが最短距離でここを使っている。唐が高句麗に攻め込んだのもここ。このルートを高句麗に占領されて

しまうと使えなくなってしまう。卑弥呼の使いは魏使が大手を振って通過できた。倭王の使いは帆船で苦労しながら渡ったので朝貢も楽にはできなかった。

4. 任那（伽耶）解体のプロセス

朝鮮半島の南部に伽耶（加羅）諸国として存在し朝鮮半島の四ヶ国（高句麗・百済・新羅・加羅）として活動していた国が滅亡して無くなってしまった。多くの歴史家は新羅に戦争で負けて消滅してしまったと解釈している。しかし実態を良く掘り下げていくと伽耶国に生活していた倭人たちはその当時のベストな選択ををして夢の国「日本列島」に移転してしまった。倭人だけでなく、巡りあわせで同じ運命にあった百済の人々を伴って移動し高度成長期の古墳時代から奈良時代を築いた原動力になった。この後、高句麗や新羅も政変を繰り返したので戦禍に追われた高句麗（コマ）や新羅（シラキ）と称される人々もやってくるようになって日本の形が作られていった。解体のきっかけは金官伽耶の新羅への分譲であり日本書紀が記す新羅との戦争に敗れたからでは無いので任那復興を欽明天皇が望んだ、日本府が任那復興会議を招集したとの話は筋が通らないと考える。

伽耶諸国の変遷

伽耶誕生の地、金官伽耶が中心国家であったと考えていた筆者にはいつの間にか山奥の高霊にある大伽耶に中心が移ってしまった謎を解くのに時間がかかってしまった。海洋国と山国のたどる運命みたいなものが推測される。

（1）金官伽耶の繁栄と没落

伽耶諸国間で勢力分布に大きな変化が発生してきた。3、4世紀は金官伽耶が交易を通して圧倒的な力を持っていた。金海にある遺跡や古墳からもその影響が明瞭で、支配者集団の墳墓をみても伝統的でシンプルな木棺墓から四隅に丸木柱を立て丸太を横に積み上げて作る木槨墓に変化し民衆と支配者層の豊かさの差がはっきりしてきている。ところが5世紀の初め頃から支配者層の墳墓が築かれなくなってしまった。

どこの港町でも同じだが海外の情報が多く入り、日本の仁徳天皇の時代から近畿地区での土木工事が活発になり、継体天皇の頃には琵琶湖から淀川に沿って難波までの各地で開発が行われ古代の高度成長期がやってくるとの情報が届いていた。労働者が不足して朝鮮半島の人々をいくらでも引き受けられるフロンティアが関西地区に誕生した。金海地区の支配者層は仲間を連れて集団で移住先に移ったので金海地区は人口の過疎化現象を招来していた。国王も日本に誕生していた大和朝廷の関係者と密接な連絡を取り合いながら王自身日本に移る時期をチェックしていた可能性がある。

（2）金官伽耶の滅亡

三国史記の情報では倭国軍や倭人に散々痛めつけられてきた新羅の首都金城であったが500年代に入ると伽耶国に変化が表れてきた。

522 金官伽耶国王仇亥が新羅法興王に花嫁を求めてきた（仇衡王の妻になる人）

524 金官伽耶国王が新羅に来て同盟関係を結んだ（金官を新羅に統合するための条件を詰めた）

528 新羅にて初めて仏法を行った。訥祇王の時（417～458）高句麗から僧「墨胡子」が一善郡にやってきて仏教を伝えた。

532 金官国王「金仇衡」が王妃及び3王子（奴宗、武徳、武力）を連れ国の財物・宝物を持参して新羅に投降した。新羅王は彼らを礼式に従った待遇をして上等の位を授け本国を食邑として与えた。末子の武力は新羅王朝で最高位の角干まで累進した。そして武力の孫から統一新羅の建国者で韓国史上最大の英雄と称される金庾信が生まれて出た。

新羅王室の習慣で他の部族を吸収する時その王族を貴族階級として処遇し、持っていた地域から上がる租税は年貢として所有することを認めていた。

この推移をみると金官統治を新羅に譲る形で行ったもの。後の歴史変化をたどっていくと次の事実が浮かび上がってくる。

1.) 継体天皇の時クーデターによって天皇と2人の王子が没して（531年に事件が発生したと百濟本記に掲載されている）。532に欽明天皇が誕生した。日本書紀では27代安閑、28代宣化が数年づつ在位しているので欽明の即位は9年後の541年になっている。継体天皇の墳墓の様子から見ても（皇子2人も一緒に埋葬）皇子の継承は無く継体 — 欽明へと王権が移動したものと推定される。このお膳立てをしたのが蘇我稲目大臣であり娘堅塩媛、小姉君の姉妹を妃に送り込んで蘇我全盛時代を築いた。

2.) 532年の金官伽耶滅亡と同じ年に欽明天皇の即位が行われているので金官の新羅への分譲と継体の死・欽明の即位は仕組まれた政変劇であった可能性が高い。磐井の変もからんでいるので別にまとめる。

3.) 欽明天皇は誰か

金官伽耶最後の王は金仇亥（仇衡王とも呼ぶ）である。その王が529年日本に来ている。彼が蘇我氏と組んでクーデターを挙行し、継体朝を無残な形で消去してしまったというのが事実であった。仇衡王は3人の息子を持ち三男の武力と娘は新羅王室で大活躍しているが長男奴宗は表にでない。欽明天皇は仇衡王であり、王の長男奴宗が30代天皇敏達であり半島にあった時生まれていた子どもである。彼は522年新羅法興王の娘と結婚していて長男奴宗は532年欽明天皇即位のときには9歳になっていたはずである。

4.) 景行天皇以下の国つ神系からこの時本来の天照系に戻った
天皇の名前は「天国排開広庭天皇」であり「広い庭のような夢一杯の理想社会を築く天照
の神である」と宣言している。

5.) 欽明が継体と手白香皇女の子どもであり兄弟の娘石姫と結婚して敏達を生んだと
の系図は間違っている。もっと単純で継体－欽明－敏達は一直線につながっている。

半島にあった伽耶連合にとってみては日本列島は海面が下降して海岸線や大河の沿岸など
が陸地に代わり広域な泥水を含んだ平野が現れた。ここは宝の山であり開発資源を全てこ
こに投入してきた。全ての倭人にとっての関心事は日本のどこに行き何をするかであっ
た。百済や新羅との関係も変わってきて土地や人民を彼らに渡してしまっていて上がってくる
租税を日本の皇室に送り届ける習慣が長いこと続いていたことが分かっている。

(3) 四ヶ国の戦国時代と統一新羅まで

漢の支配が弱まり、BC37年に朱蒙(しゅもう)が高句麗を建国した。高句麗は次第に四方
に勢力を伸ばし、楽浪郡や帯方郡を滅ぼした。391年に即位した広開土王は遼東に勢力を伸
ばし満州南部から朝鮮半島の大半を領土とした。半島南部では3世紀頃に三韓(馬韓、辰
韓、弁韓)と呼ばれる国が分立し、楽浪郡の支配を受けていた。4世紀中には馬韓を百済が、
辰韓を新羅が、弁韓は伽耶諸国が支配して、朝鮮半島に四国の戦国時代が始まった。四国
は激しく争い、新羅は他の三国に圧迫され困難な時代を送っていた。新羅は高句麗と組ん
でバランスを取ろうとしたが取り込まれることを警戒して百済、倭にも救援を求めて動い
た。百済は高句麗の圧力を一番受けて最初漢江(ソウル)辺に根拠を構えたが圧力で南下
し、錦江の熊津、更には扶余に移動している。百済も単独では対抗することができず倭国
の力を最も頼りにした。6世紀伽耶諸国は半島から日本列島に移った。中国を統一した隋は、
4度の高句麗遠征に失敗して滅び、次の唐も高句麗遠征に失敗した。新羅は唐との関係を強
化し、唐・新羅連合軍は660年に百済を滅し、663年には百済の遺臣とそれを支援する日本
からの派遣軍を白村江で破った。そして668年には、残った高句麗を滅し、新羅が朝鮮半
島を統一した。

(4) 戦国時代の英雄と倭軍の指導者

韓半島の戦国時代には数多くの英雄が活躍し、国が勢いを付ける時と、敗戦を期に優秀な
人材が枯渇してしまって国が衰退する時期がある。百済も勢いがある時は近肖古王が平壤
を攻撃し高句麗の故国原王を死に追いやる時期もあった(371)。高句麗は広開土王や王碑
を建設した長寿王の時代は王自ら戦場を駆け巡り次々に勝利し領地を拡大した。新羅兵も
軍事的には目立たなかったが金官伽耶最後の仇亥王の三男武力が王宮に入ってから活動

が顕著である。彼の孫の金庾信は金春秋王と組んで統一新羅を実現した大英雄であった。倭国も三国と同じように領土拡大を狙って王自身が最前線に立って戦況をにらみつつ次々に戦術を組み立て戦った。中国の宋王朝への朝貢は、安東將軍・倭国王としか冊封してもらえなかったが自称では「使持節・都督倭 百濟 新羅 任那 秦韓 慕韓 六国諸軍事・安東大將軍・倭国王」を名のっている。五番目の倭王「武」の時ついに宋から自称に近い形で冊封してもらうことができた。ただ百濟は既にもっと上位の形で中国から冊封されているので除外され、都督倭以下に加羅が追加されて六ヶ国になっている。最初の冊封安東大將軍は鎮東大將軍（479）、征東大將軍（502）にまでランクアップされ中国に軍事力を正当に評価されている。

（5）伽耶（加羅）滅亡へ

*****日本書紀*****（新羅に譲った領地回復運動について）

532 百濟聖明王が任那復興協議会を百濟にて開いた。金官任那は無くなり西隣の阿羅に日本府が移った。加羅（大伽耶）、多羅など代表10人と日本府の吉備臣が集まって協議した。欽明天皇は任那の復活を望んでいるが新羅に対抗する具体的な策がない。日本府と新羅が通じているとの情報で百濟はいらだちを隠せなかった。

535 百濟は日本府と任那（大伽耶）の執事と呼んだが彼らは理由を付けて来なかった。津守連や河内直は日本府の代表者であるが評判が悪く信用できないと批判されている。そして百濟は日本府の役に立たない役人を本国に引き取って欲しいと意見している。

540 百濟は2人の使者を遣わし日本に救援を要請。しかし阿羅と日本府が高麗に百濟を攻めるようにという指令をだしたとのうわさも聞かれた。

543 聖明王は自ら自国と新羅・任那2国の兵を率いて高麗を討ち漢城を回復した。しかし百濟はここを維持することができず新羅に奪われ百濟への前線基地「新州」に組み込まれた。

540 新羅真興王が即位。異斯夫（いしふ）を軍部の統括者にした。注）異斯夫は智證・法興・真興三代の王に仕え新羅の発展期を代表する英雄。

545 新羅国史の編纂を開始する。百濟や加羅にはこのような動きが無かったため三国史記のほとんどは新羅の史実で埋まってしまった。

548 高句麗が穢（わい）人を使って百濟を攻撃。百濟が新羅に救援を求めてきたので3千人の精兵を派遣して撃退した。

553 百濟の東北部を奪い取って新州（漢江流域）をおき武力を新州軍首とした。

554 自分の娘を真興王に嫁がせ努力してきたが百年続いた百濟・新羅の友好関係の終末を悟った聖王は倭軍と共同で自ら歩騎3万の大兵力を率いて管山城（沃川郡）を攻撃した。戦い初期は王子の余昌の活躍で百濟が優勢だったが、敵陣深く入りすぎた所に、新州の金武力が応援に駆け付けてから形成が逆転し、王は一武将によって戦死させられてしまった。4人將軍や士卒9,600人がことごとく殺された。倭軍の本体もここでほとんどを亡く

してしまったとみられる。（生還できた兵士は皆無だったとの記録がある）

562 倭国（伽耶）が内乱を起こした。真興王は異斯夫に命じて討伐させた。斯多含（したがん）を副将にし、5千騎を率いて出撃倭城の柵門に押し入り白旗を立てた。この事件により半島に存在していた大伽耶・伽耶・倭国・任那と称された国が半島から消え去ってしまった。

（6）百済の聖王がなぜ敗れたか

475 百済21代蓋鹵王は高句麗の長寿王と戦うも敗退し長く首都にしていた漢城は陥落し、王も戦死した。（これが長期にわたる衰退の大きなポイント）

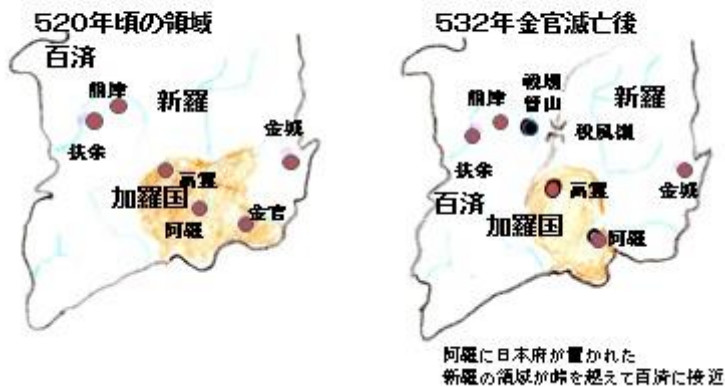
蓋鹵王は質素儉約を旨とし、国庫を豊かにし、ひたすら軍備を整える堅実な王であった。長寿王は百済を内部から崩そうと年老いた僧の道琳（どうりん）を間諜として送り込み、蓄えた資金を城郭や宮殿の補修など土木工事に使わせ、国力を衰退させて勝利した。

477 次の文周王は仕方なしに南方の熊津に遷都したが3年目、兵官佐平の解仇に殺害された。子の三斤王も在位2年で亡くなり東城王（文周の弟）が即位（491～519）した。この年代は高句麗が強力で（長寿王）、百済・倭連合軍と新羅がそれに対抗して攻防戦が続いた。百済と新羅は協力することもあったが互いの警戒心は強く様々な紛争を繰り返した。

— 強力な王を輩出する高句麗に対して数年で王が変わる百済は人材が育たなかった —

加羅国の領域Ⅱ

- ・ 6世紀前半の姿 日本列島への移民が増加して往時の軍力の維持が困難になってきた。



図一 8 滅亡寸前の加羅国の領域

新羅が国力を付けてくる

22代智證麻立干は王号を採用、国名を「新羅」にしたり、州・郡・県の地方制を定めたり、京師に東市を開設するなど国家制度の整備に顕著な業績を残した。（500～514）

次の法興王も英邁な君主で新羅国として初めて仏教を受け入れて（528）、伽耶（加羅）国を合併して新羅の国力を飛躍的に高めた。

— 弱体な国家だった新羅が傑出した王の下、着々と国作りに励み強国に脱皮できた —

百濟聖王の治政 (523~554)

先代の武寧王の時から百濟は不運なことが続いてきた。聖王の即位 (500) は父東城王が大
臣の白加 (べくか) の反乱により死亡したため。

502 飢饉で農民が餓死したり疫病が大流行した。

506 にも同様なことが起き雨が降らなかった。

512 大水害とイナゴの被害で飢饉になり新羅に逃亡するものが多かった。

523 王即位 新羅法興王 10 年目、高句麗安蔵王 5 年目。高句麗南下したが王は佐将に歩・
騎 1 万の兵を授けて撃退。

529 高句麗王みずから大軍を連れて出撃、北辺の要塞を落とす。聖王は歩騎 3 万を北上さ
せ戦ったが 2 千余の戦死者を出して敗退した。(この敗退も後に禍根を残す結果につな
がった)

532 伽耶が新羅に併合されてしまった。

538 天体でも兇相が現れ人心が落ち込んでしまった。これを一新するために都を泗泚 (さ
び) に移し国名を南扶余に改めた。

548 遷都後の 10 年間は天候に恵まれて豊作が続いた。高句麗は若い陽原王がわい兵を含
む 6 千の兵で百濟北部独山城に攻撃を加えた。新羅の真興王に救援を依頼して撃退した。

550 聖王は將軍に 1 万の兵を与えて以前百濟だった道薩城を奪回した。百濟と高句麗の境
界線は南下を続けて、聖王の頃は車嶺山脈の周辺を巡る激しい攻防戦になっていた (太田
市周辺)。新羅の真興王は金武力、居斯夫など文武の賢臣を揃えそれまでの王の中で領土
を最も広く獲得した人であった。百濟-高句麗の紛争の中で疲れてしまった隙について新
羅の居斯夫が 2 城を攻略し兵 1 千を駐留させて守りを固めた。

553 百濟東北部と高句麗東南部を占領して自領に編入し金武力を軍司令官にした。

554 管山城（沃川郡）の戦いと聖王の死

*****聖王（日本書紀は聖明王）の人物*****

三国史記では知識英邁にして決断的だったと評価している。仁慈の心に富んだ平和主義者だった。彼は熱心な仏教信者で百済国内にも仏像を作ったり寺院を作ったりしたがそれをもっと広めたくて 552 年には仏像と経典を日本に伝えた。（欽明天皇 13 年）

（7）任那と伽耶（加羅）について

任那の語源については、『三国遺事』所収の『駕洛国記』に見える首露王の王妃がはじめて船で来着した場所である「主浦」村の朝鮮語の訓読み（nim-nae）を転写したものとする鮎貝房之進の説が日本の学界では主流を占める（ウィキペディアの解説）。従って洛東江が海に注ぐ金海が任那の指定している領域であると想定される。

紀元前後の半島南部には原三国と称する馬韓・辰韓・弁韓の国があった。扶余族の高句麗が南下してきて半島は高句麗・百済・新羅・加羅（伽耶）国など四国並立時代を迎える。6 世紀には高句麗・百済・新羅の三国になり南東部にあった新羅が全体を掌握して統一新羅が誕生していった。これら各国が存在して行くために国相互間及び強力な中国王朝との戦争が行われ半島の戦国時代が長期間継続していた。

伽耶国の存在

半島最南部には A D 4 2 年首露王に引率された倭人が戦国時代の混乱を避けて大挙して中国本土から移住してきた。平坦部には先住民が住み着いているためたくさんある小島に寄り添って生活を始めていった。この時首露王が王宮（金官国）を構えたのが金海であった。金海は洛東江が海に流れ出す天然の良港をもっているため古くから交易の中心になっていて狗邪韓国（魏志倭人伝）とも呼ばれていた。ここは日中韓の交易の拠点となっていて日本側では筑紫・丹後、朝鮮半島では金海・慶州・平壤（帯方郡）などがある。最も重要な交易品は大伽耶近傍で産出された銑鉄であり各地の遺跡にはここから運ばれた鉄と各地の製品の交換所であった。高霊の卑弥呼の墳墓からは越から運ばれたヒスイのブローチや管類が多数見つかっているがこのようにして運ばれたものである。

任那日本府

日本府は金官にあり、最後の金仇衡王がここを新羅に譲ってからは阿羅伽耶に移動したと日本書紀には記載されている。大和朝廷の出先機関がここにあつて半島諸国間への支持命令はここから出されていたと説明されている。しかし百済聖王の欽明天皇への救助要請や任那復興に 2 回の会合の中味を検討して見る限りでは大和を代表して出席し会議のリーダーシップを取って方針を決めて行くような気配は全くない。会議に出席することさえ逃げ

回ってしまい百済から邪魔だから国に引き取ってくれと頼まれる存在であった。

このような機能が半島にあったとは考えられない。三国史記の翻訳者、井上秀雄は「任那日本府」とは『日本書紀』が引用する『百済本紀』において見られる呼称であり、6世紀末の百済が高句麗・新羅に対抗するためヤマト王権を懐柔しようとして、『魏志』韓伝において朝鮮半島南部の諸国を意味していた「倭」と日本列島の倭人の政権とを結びつけて、ヤマト王権の勢力が早くから朝鮮半島南部に及んでいたかのような印象を与えるために造りだされた用語である。任那日本府とヤマト王権とは直接的には何の関係も持たないことが読み取れると主張した。

(8) 半島で活躍した倭王と倭軍のまとめ

a. 倭国は高霊にあった邪馬台国から生まれた国で「大伽耶」「加羅」など色々な名前を持ち、呼ばれていた。5世紀までは倭人は朝鮮半島と日本列島に住んでいて時代と共に日本に住む人の数が増えて行った。6世紀、加羅国が滅亡してほとんどの倭人が日本に移住してしまっ後は「日本」＝「倭国」と呼んでも間違いではない。

b. 三国史記に書かれている「倭人」、「倭王」、「倭軍」、「倭国」は日本人・韓国人の学者も国民も全て日本から船で遠征した人々であると説明しているためにあらゆる所で矛盾を起こしている。

倭軍は朝鮮三国の中で戦国時代を送り生きるか死ぬかの戦争をやっている。どの国も国の運命を決めるのは王であり戦略に長けた将軍である。その王である天皇が日本にいて戦争の指揮を執ったとは信じられない。倭王の実力は百済や新羅を凌ぐ力をもっていた。また戦争の内容を見ても現地で生活している兵士でないと理解できない行動が多い。

c. 任那と日本府

大和朝廷は日本の出先機関を置いて諸国との交渉や軍の指揮命令を執ったとなっているが日本書紀の記述を見ると代表者が能力がなく現地の人間を使いこなせず、役人を替えてくれとの要求も出ている。

d. 倭軍の戦争目的

彼らが日本から派遣された倭王であり倭軍であったとしたら彼らの戦争目的は何だったのか。日本には開発すべき国土は無数に存在していた。他の三国と領土の取り合いをする必要性がなく目的の無い戦争を日本から人を運んでやったという馬鹿げたことになる。